題名　小さな箱に入った大きな世界に生きる僕ら
二松学舎大学付属柏高等学校　鈴木優奈

多分、みんな小さな箱の中で生きているのだと思う。

私は高校三年生になって、小さな驚きを発見した。「みんな」の家では日曜日に家族が家に集まるらしい。
発見したのはふとした瞬間だった。友達との学校の休み時間のたわいもない雑談。昨日の休み、何をした？　そんなありふれた会話で気付かされた。お父さんと映画を見に行ったよ、と友達が言う。君はよく家族と出かけるけど、とても仲がいいね、と私は揶揄うつもりで笑って答える。すると彼女は少し怪訝な顔をした。そこで話は最初に戻る。

別に私の家が特殊だなんて言うつもりはない。ただ、私は知らなかったのだ。日曜日に家族全員が家にいて「今日はどこに出かけようか？」なんて笑いながら会話する人がいるなんて。そんなの、漫画の中だけの世界でしかないと思っていたから、単に驚いた。私の知ってる世界では主人公は私で、私の視点からしか世界は見えない。つまり、事実がどうであれ、自分の知らないものは世間一般のあたりまえでも認識できないのだ。世界は広くても見上げれば同じ空が繋がっている、なんてよく言われるけれど、そんなの嘘だと思ってしまう。確かに同じ空の下に生きているかもしれないけれど、空の見え方は違うのだ。雲が空を隠してしまうように、私たちの見える景色も個人によって見えたり、雲隠れしてしまったりする。私たちがあたりまえだと思っている常識や日常なんて、少し歩いただけで簡単に変わってしまう。だから、みんな小さな箱の中で生きていると思うのだ。
授業中に社会の先生が「家族は社会の最小単位だ」と仰っていたことを記憶している。その言葉はストンと私の胸に落ちた。社会、と言うよりは世界と私は認識した。家族は、私たちの世界そのものなんだと思う。
よく小説の中なんかで、いじめに悩んで命を絶とうとする人がいる。そんな時は必ずと言って良いほど、学校だけが世界じゃない。今は学校が全てに思えるかもしれないけれど、もっと世界は広いんだから、といったようなことを言って励ます登場人物がいる気がする。いじめがあるとか無いとかは関係なく、そうだと思う。多分みんなの世界は狭い。そして、それに気がつかない。自分を無意識に小さな箱に閉じ込めてしまっているんだ。そして、その箱の内側だけを色とりどりの絵の具で塗って満足して死んでいく。箱の外にはもっと違う世界があるに決まっているのに、気がつかない。井の中の蛙大海を知らず、なんていうけど、私に言わせてみれば、箱の中の人間世界を知らず、と言ったところである。

私たちの、世界と名付けられた小さな箱は年齢と共に成長していく。家族から、学校とか、友達とか趣味とかそんなものと触れ合ってどんどん形を変えていく。誰一人同じ箱の人はいなくって、それでもどこか同じようなところがあったりする。だから他人の悩みに共感できたり、理解できなくて決別してしまったりするのだ。きっと私たちの見ている世界は全員違う。だけれど、全員が同じ景色を眺めていると誰もが錯覚している。触れてきた環境がその人の目に映る世界を変えているのに、誰もが自分と同じものを見ているに違いないとそう確信する。だからこそ人はすれ違う。

みんなが同じ世界の中で、生まれた瞬間から形作られた箱越しに違う世界を見ている。そんな自覚が私たちには必要なんだ。そうすればきっと分かり合える努力をすることができるのだから。私たち一人ひとりがいろんな人と関わって、いろんな体験を肌で感じられたらもっと世界は優しくなれる。箱を破って、大きな世界につながる空に虹を見てみんなで笑えたら、それはとっても素敵だ。
とりあえず私も大学生になって新しい世界を見てくることにしようか。それじゃ、行ってきます。